昭和戦前・戦中期神社建築における細部装飾の地域性

4年9組1番　朝香　智有

第1章　序論

1-1　背景と目的

神社というと、遥か昔に形成された伝統が変わらず守られてきたというイメージが強いかもしれないが、近代に入ってからも多くの神社が日本各地や当時の占領地に創建され、それらを見る際には伝統の継承と近代的な革新の両方から見る必要がある。この継承と革新も時期によって相当変化するが、本研究で注目するのは昭和戦前・戦中期の内務省神社局−神祇院造営課の手がけた作品群である。

近代の神社を対象とする建築史的研究は、十分な研究蓄積がなく、国家神道と建築表現との関係に取り組んだ丸山茂以来、近代和風建築のひとつとして神社建築をみる藤原恵洋、ナショナリズムとモダニズムの関係に着目した藤岡洋保、植民地を含む帝国の枠組みから神社社殿・境内の設計方法に迫った青井哲人など数例の先行研究のみである。

藤岡、青井らの研究により、昭和戦前・戦中期の神社局－神祇院の神社設計の頂点にあった技師・角南隆らの思想や設計方法論、設計体制等の特質が明らかにされ、明治・大正期までほとんど顧みられなかった社殿建築の「機能性」と「地域性」から、近代的な神社設計方法論の確立を目指したことが指摘されている。

「機能主義」については、神職による日常の奉仕と多様な祭典の演出が求められる中で、互いに独立することの多かった社殿建築を接続・一体化し、廻廊を用いて中庭を囲む等の空間構成を用いたことであり、青井はそれが帝国全土の神社に、その規模等に応じて系列的に適用されたことを示している。空間構成のこうした系列的標準性に対し、細部意匠において神社が立地する地域の伝統を採取し適用しようとしたのが、「地域主義」である。

本研究では、この地域主義の側面に注目するが、神社本庁の『近代の神社景観』[1] によれば、角南らは全国の神社の調査を行い、設計していたことが指摘されており、そして角南が撮影した写真を多数紹介している。また、角南体制の集大成とされる滋賀県の近江神宮（1940年竣工・鎮座）について、その調査にあたった山岸常人氏は、「近江神宮の細部意匠を見ると左右対称の彫刻の蟇股、雲と植物が融合したような意匠の虹梁絵様・実肘木・桁や頭貫の木鼻は滋賀県下の室町時代中後期の遺構にそのデザインソースを求めたようなものである」と述べている[1]。ただし、これは日本建築史の専門家として指摘という点で貴重ではあるものの、観察の所見を述べるにとどまり、具体的な根拠は示されていない。

こうした背景を踏まえ、本研究では、近江神宮に焦点を絞り、その細部装飾が、実際に滋賀県下の社殿遺構に「デザインソースを求めた」と言えるのか、もし言えるのなら、どの時代のどの神社が模範とされ、どのようにデザイン上の操作が行われたのかを明らかにすることを目的とする。すなわち、これまでに指摘されてきた、昭和戦前・戦中期内務省−神祇院の設計方法の「地域主義」について、具体的に検証するのが本研究の課題である。

1-2　調査対象

先述の『近代の神社景観』[2] には、角南隆自ら全国を訪れて撮影した都道府県の写真が紹介されているが、同書によれば角南らの調査は主として地域の主要な有力社に注目したものらしい。そこで、本研究では、近江神宮との比較対象として、滋賀県下の国宝又は重要文化財の建物を持つ神社、ならびに国宝・重文指定がなくとも旧社格が官幣大社である建部大社・多賀大社を選択することとした。このうち多賀大社の主要社殿は、角南らに先駆けて近代的神社設計方法を模索した大江新太郎の設計であり、比較検討の意義があると考える。

検討対象とする装飾部位は、蟇股・笈形（大瓶束に付属する結綿を含む）・木鼻・手挟・懸魚の計5つを取り上げた。これらが比較的意匠上の差異が際立つ部分だからである。

1-3　研究方法

まず、近江神宮ならびに滋賀県下の神社の調査を、第1回（6月6日～9日）・第2回（7月4日～7日）・第3回（10月20日～23日）の計3回実施し、検討対称の装飾部位について写真撮影によりサンプルを採集した。

次に、これらサンプルを、部位別に形態的特徴からグルーピングし、これと近江神宮の当該部位を比較対照することにより、近江神宮の設計において参照された可能性が高いタイプやその時代を見いだしていく。そのうえで、滋賀との類似性の強い京都をはじめ、近畿圏を中心に代表的事例についても文献により比較することで、その参照関係がどの程度の範囲に限定できるのか（例えば滋賀県下の特性があり、それに留意していたのか、あるいは近畿圏程度の

漠然とした中での地域性なのか、はたまた特定の時代を踏まえてはいるが地域性への拘泥があるとはいえないのか)を考察する。

1-4　構成

第 1 章で目的や方法を述べた後、第 2 章では先行研究をまとめるかたちで明治以降の神社制度と神社造営体制の変遷、研究対象の近江神宮の概要等を述べる。第 3 章では調査対象の細部装飾を概説した後、近江神宮と実地調査で集めた滋賀県下の神社及び参考文献に所蔵されている他地域の細部意匠の比較検討を行う。第 4 章では、第 3 章で得られた結果を基に、総括的な考察を示す。

第 2 章　近代の神社造営

2-1　新政府と神社

宗教的権威の動揺する中、明治政府は新たな統一国家の象徴として、天皇に新しい宗教的権威の装いを施すことを考えた。そして、神祇官を再興し、全国の神社や神主以下をその支配下に置くことを宣言した。天皇崇拝を中心とした神道教義を組織的に民衆に浸透させ、宗教により天皇制国家の創出を狙ったと考えられる。

明治 10 年 1 月に内務省社寺局が設置され、約 23 年間継続された。社寺局は、宗教に関する全ての行政を管理する組織であり、以前に神道・仏教を合わせ行われていた教部省による国民教化を継承するものであった。しかし、明治 33 年 4 月の内務省官制改正により分割され、内務省神社局と宗教局が誕生した。神社神道とその他宗教が差別された理由は、明治政府による国家神道体制確立への意志に関係していたと考えられる。

2-2　内務省神社局・神祇院の業務と変遷

神社局には、営繕事業を担当する技師と技手という技術者ポストが置かれていた。明治 35～45 年においては技手 1 名を除き、技師・技手ともに造神宮使庁を兼任していた。しかし、大正 9 年以降に増員がはじまり、昭和 10 年前後からはよりいっそう人員は増えていき、昭和 14 年には技師・技手を合わせ 26 名まで組織は拡大している。この増員は、神社局による営繕工事の増加が関わっていると考えられる。

2-3　昭和戦前・戦中期神社建築の変遷――「制限図」から「昭和造」へ――

明治後期～大正における政府管轄の神社造営をリードし、明治神宮造営の中心人物でもあった伊東忠太は、明治 40 年に完成した宮崎宮で「制限図」の枠を様式レベルで超えている[3]。そして、伊東とともに明治神宮造営を設計した大江新太郎により「制限図」の規制は弱められていき、神社局の中心が角南隆になると「昭和造」と呼ばれる昭和期を代表する神社の姿が誕生し、「制限図」から脱却した。神社建築において、この詳細まで記した「制限図」は時代に適応していないと評価されたのである。

2-4　神社局造営課――角南隆による機能主義と地域主義――

昭和戦前・戦中期の内務省神社局で最も活躍した人物で、「昭和造」と呼ばれる様式を生み出した角南隆が「機能性」以外に重視したのが「地域性」である。青井は植民地下朝鮮の江原神社を例に挙げ、木部の丹塗り、朝鮮瓦やオンドルの採用といった特徴を指摘し、その設計を顧問として指導した角南らの地域主義を例示している[4]。この例からわかるように、彼らの地域主義は意図的なものであり、神社建築を地域に定着させるための方法を帝国という視野で試行錯誤していたのである。そして、近江神宮も同様に国内における試験体の一例であったと見るべきだろう。

2-5　近江神宮

近江神宮は、昭和 15 (1940)年 11 月 7 日、天智天皇を御祭神として造営された、近代創建神社の 1 つである。旧社格は官幣大社である。

近江神宮の様式は、前出している「昭和造」と呼ばれる、近代に内務省神社局によって生み出された社殿の形式をしている。「昭和造」は神職の日常的奉仕や祭祀を円滑にできる“機能性”を重視しており、その境内構成は一連の方針の中で、社格や造営規模、部分構成に対し柔軟に対応し、社殿も回廊などで接続され、拝礼・参列空間は複合化・肥大化する傾向が強かった。

第 3 章　装飾考察

3-1　装飾の種類

蟇股…元は虹梁上で荷重を支える構造材であったが、平安後期以降意匠性が高まり、装飾としてのみで使用されることも多く、時代判定にも使用される。

笈形…蟇股と似た見た目をしている。中央を大瓶束がある。

木鼻…梁が柱から突き出た部分に彫刻などの装飾を施したもの。

手挟…軒の勾配により生じた三角形の隙間を埋める装飾。

懸魚…破風に取り付けられる装飾。

3-2　近江神宮の装飾

i　蟇股及び笈形

図 2　楼門（左）及び外拝殿（右）蟇股（筆者撮影）

近江神宮の蟇股はすべて左右対称の比較的シンプルなデザインである。基本、両肩から伸びる曲線が中心で渦を巻き、新芽の様な部分には猪目が彫られている。楼門・外拝殿の蟇股及び笈形の脚のデザインは明治 44 年に竣工した東本願寺勅使門のものと非常によく似ていることから、明治以降に建てられた社寺のデザインも地域性を組み込む際に意識した可能性があることが推測できる。

ⅱ　木鼻

図 3　楼門木鼻（左）、内拝殿木鼻（右）（筆者撮影）

蟇股と比べデザインに統一性がなかった。本殿に近づくにつれ彫刻は複雑化する傾向が見られ、柱などから突き出した長さはほとんどのものが短めである。

ⅲ　手挟

図 4　本殿手挟（筆者撮影）

面は広く、先端から約半分のところまで彫刻が施されており、先端は渦を巻いている。彫刻は凹凸がはっきりと、捻じれたようなデザインが印象的で、立体感がある。

ⅳ　懸魚

図 5　神座殿懸魚（左）、回廊懸魚（右）（筆者撮影）

唐破風の懸魚は渦と猪目、他の多くは回廊懸魚のような形で、中心に瓢箪と左右下部に猪目が彫刻され、六葉の飾金具がついている。猪目などは全体に対し、比較的大きめに施されていた。他に、一般的な切懸魚を少し変形させたものが確認できた。

3-3　滋賀県下の近代神社の装飾

ⅰ　多賀大社

図 6　幣殿蟇股（左）、本殿手挟（右）（筆者撮影）

どれも個性が強く、複雑なデザインをしていた。これは社殿設計に携わった大江新太郎が、当時の神社建築を現代建築と位置づけしていたことに関係しているとみられる。大江は明治神宮楼門でもアール・ヌーヴォーのような蟇股をデザインしている。

ⅱ　建部大社

図 7　神門蟇股（左）及び木鼻（右）（筆者撮影）

神門は昭和 9 年の室戸台風後に造られたもので、蟇股・木鼻は近江神宮のデザインに似ている。本殿は動物などの江戸時代特有の華美な装飾で類似性は無かった。

3-4　滋賀県下の国宝・重要文化財の装飾

調査神社は計 50 社（境内社などは含まない）、蟇股 125 種、笈形 3 種、木鼻 27 種、手挟 21 種、懸魚 40 種を個々に考察した。以下に近江神宮と類似しているもの、もしくは似たようなデザインが多く確認できたものを載せる。

ⅰ　蟇股及び笈形

（例）

図 8　志那神社（筆者撮影）

写真は鎌倉時代のもの 1 例である。腹のデザインが近江神宮のものと似ており、曲線と新芽が見られる。

ⅱ　木鼻

（例）

図 9　和田神社（左）、苗村神社（右）（筆者撮影）

それぞれ調査神社の中でも、比較的多く見られた形態をしているものである。近江神宮のものとは全体の雰囲気すらも異なっているように見える。

ⅲ　手挟

（例）

図 10　大笹原神社（筆者撮影）

このように先端が渦を巻き、唐草のデザインが施されている手挟は滋賀県下では室町時代に多く見られ、類型のものも含めると最も採用されたデザインであった。

ⅳ　懸魚

（例）

図 11　地主神社（左）、春日神社：東近江市（右）（筆者撮影）

猪目懸魚を持つ神社が多かったが、その中でも彫刻が 3 つとも瓢箪のものが最も多く見られ、日吉大社では六葉以外に花の彫刻が付加されていた。彫刻が瓢箪と猪目のものは次に多く、鎌倉～室町時代に確認できた。

3-5　各時代の装飾代表例

（例）

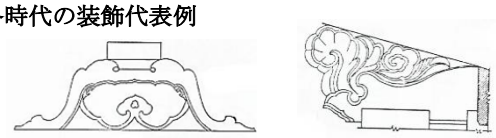

図 12　新薬師寺地蔵堂蟇股（左）、観心寺本堂手挟（右）

近藤豊の『古建築の細部意匠』[5] に所収されている鎌倉～江戸時代のそれぞれの代表例を表にまとめて各時代の特徴を探し、調査した神社と比較することで滋賀県特有の彫刻などがあるかを検証した。

結果、装飾の変遷は滋賀県下のものと一致しており、近畿圏のものは類似する点が多いことがわかった。

3-6　小結

3 章を通して、左右対称の蟇股や先端が渦を巻く手挟など、表による分布確認から近江神宮の細部装飾は鎌倉～室町時代のデザインを意識していることがわかり、滋賀県下のでも同じようなものが確認できた。

しかし、それらは近畿の他府県にも確認することができ、手挟は大阪の観心寺に、“左右対称の彫刻の蟇股”に関して言えば福井の明通寺にも似たようなデザイン見られた。

近畿、特に京都と滋賀という括りでの地域性はあるとは言えるだろうが、滋賀県というより狭い括りの地域性を指摘することは難しいという結果となった。

第 4 章　結論

4-1　昭和戦前・戦中期神社建築における細部装飾の地域性

本研究では、昭和戦前・戦中期神社建築において、占領地では確認されていたが、国内に関しては曖昧であった「地域性」に着目し、その有無を検証した。

滋賀県下のデザインと類似していた装飾部位は蟇股・手挟の 2 種で、鎌倉～室町時代のものが参照されていたということは間違いない。しかし、木鼻に関しては類似性をほぼ確認できないという結果になった。

鎌倉～室町時代にデザインソースを置いたことはわかったが、地域性という点では滋賀県下のみでは指摘するのに不十分であるため、細部装飾に関する書物に所蔵される代表例と比較したところ、近畿圏でも似たものが確認できた。近藤も著書の中で滋賀と京都の細部のデザインはよく似ていると述べており、滋賀県という括りでの地域的伝統が採用されたという限定的評価は難しいと言えるだろう。

また、「地域性」の考慮について、近江神宮と同じく政府管轄営繕神社建築である多賀大社を見てみる。社殿は角南以前の神社局の中心的存在で、近代的な神社設計方法論の先駆的探求者であった大江新太郎によってデザインされており、滋賀県あるいは近畿の地域性を踏まえたものというよりはアール・ヌーヴォー的な傾向が濃厚であり、「地域性」は皆無に等しかった。そのことから、先行研究で述べられていた角南らの体制になって「地域主義」の設計方法が具体的に探求されることになったということが確かであると確認ができた。

現在示されている地域性は滋賀県という括りであったが、他府県にも類似性は見られた。その理由として、装飾の参照している時代が鎌倉～室町時代という点が挙げられる。調査した部位の多くは、この時期に意匠化もしくは発生している。そのため、彫刻が精密になり、複雑化していく桃山以降に対し、デザインの種類がある程度決まってしまっているのである。よって、社寺の多い近畿圏では似たようなデザインが確認できたと考えられる。

結果として、地域とは県以下の小さな範囲で見たものではなく、近畿圏ほどの大きさで考慮されていたという結論に辿り着き、実際に角南体制下に造営された神社の細部装飾には地域性が組み込まれ、それらを本研究で確認することができた。また、デザインは単なる模倣ではなく、設計者自身のアレンジが施されており、蟇股の場合は腹の形態を鎌倉と室町の特徴を結合したものと見ることができ、手挟の場合は彫りこみが深く立体的で、捻じれなどが見られ、躍動感があった。

今回は滋賀県下に調査対象を絞り、最終的に文献による資料との比較から地域性は近畿圏ほどの規模となるという結果になった。今後の課題は、京都を中心とした近畿圏の主要な神社の細部装飾を調査し、より範囲を明確なものにすることが挙げられる。

【参考文献】

1)『近代の神社景観』、中央公論美術出版、1998 年

2)『滋賀県の近代和風建築――滋賀県近代和風建築総合調査報告書――』、滋賀県教育委員会事務局、1994 年所収

3）丸山茂「伊東忠太と神社建築――明治以降の神社建築に見る国民様式の興亡」、『日本の建築と思想――伊東忠太小論』、同文書院、1996 年 4 月、pp119-125 所収

4）青井哲人「角南隆　技術官僚の神域：機能主義・地域主義と〈国魂神〉」 、『建築文化』639 号、2000 年 1 月、pp76-81 所収

5）近藤豊『古建築の細部意匠』、大河出版、昭和 42 年